

チュラーロンコーン大学

桂 満 希 郎

.....

わたくしは、昨年の6月20日、チュラーロンコーン大学に留学するため、バンコックに来た。そして、同25日、正式に籍を入れ寮に落ち着くことが出来た。以来、友達も増えて、毎日毎日が楽しくて、帰るのがいやになるほどであるが、大学そのものについての知識は全然といってよいほど、とぼしいのである。各学部 of 学生の数とか歴史とかいったことについては、何も知らない。ついうっかりして調べそびれているうちに日がたってしまったというところである。だから、その様なことについては何も書くことができないので、今までの9カ月の間に色々と感じたことを書いていきたいと思う。チュラーロンコーン大学での学生生活を幾分でも知っていただく上に役立てば幸いである。

キャンパスに入ってまずおどろいたことは、その校舎の立派なことであった。日本の大学を見なれている者にとっては、全くとおどろきであった。全然大学という感じがしないのである。一見したところ、大寺院を思わせる様な屋根や柱の形、色取りである。明るい太陽の下で、先の尖ったミドリとダイダイ色との屋根が輝いていた。しかし、この建物の立派さに感心する反面、随分と無駄なところに金を費いやしたものだという気がした。中に入るとヒンヤリと涼しい。戸外では36°Cくらいあるにもかかわらず、建物の内部に入ると急に涼しくなり、扇風機もルームクーラーも要らない。これで、なるほどと思った。床が地面から離れているので熱気を受けず、厚い壁と太い柱とは外部の熱をさえぎり、天井も高いので暖い空気は上に逃げる。人間の居る所ができるだけ涼しくなるように工夫されているわけである。1年を通じて真夏のような気候の所では、このような建物がもっとも適しているというべきであろう。

このように、一見しただけでは無駄なことのように思われても、しばらくすると、それはそれなりに意義があり、なるほどと思わせるものがある。たとえば、

こちらの学生のほとんどの者が、本やノートにビニールのカバーをかぶせている。これも、はじめは、「うれしそうな」ものだと思ったのであるが、雨期になるとこれが役に立つ、雨期といっても、1日中降り続けることはごくまれで、晴れていた空が急にくもりだしたかと思うとすぐ降ってくる。日本の雨のように、前もって予想しておくことが困難である。そのような時に、このカバーが役に立つわけである。本やノートを保護すると同時に、雨をよけるという役割をも果たしているのである。女子は別として、男子でカサをさげている者は、ほとんど見られない。

わたくしが入ったのは文学部である。この文学部の他に、教育学部、美術学部、政治学部、自然科学部、工学部医学部の各学部がある。これらの学部 (khaná?) の下に、それぞれ、科 (phanëek) がある。文学部にはタイ語・タイ文学科、英語・英文学科、東洋語科、西洋語科、歴史・地理学科、図書館学科の7つの科がある。この科というのは、講義を受ける者からいえば、そうはっきりと分かれているわけではないようである。たたくしが入学したのは、これらのうちのタイ語・タイ文学科である。ここで、タイ語を習得するための特別のレッスンを受けると同時に、普通の講義のうちから興味あるものを選んで出席することとなった。出席はきわめてきびしい。大体にいて日本の大学とちがう点は、この出席がきびしいということと、授業時間数の多いこととであろう。普通、1週間に25時間から30時間くらい出席しなければならない。1時限は45分で休憩が15分あるので短かいように感じられるけれど、このような気候のもとではこの方がかえって能率的なように思われる。そのうえ、宿題が多い。1冊の本、あるいは本の1部を読んでレポートを書くとか、ある問題について短かい論文を提出するとかいった形のものが多。ただ、誰もが同じような文献や資料を使って、同じようなことを書いているというきらいがある。これだけ授業時間が多く、宿題も多く、そのうえ試験もあるとなると、それについて行くだけで精いっぱい、各人が自分独自の研究を進めて行くことができないのかも知れない。一般に、大学は研究するところというよりも、習いに行くところだという傾向の方が強いようである。日本の大学生と較べると、教室以外での勉強や研究は、余りなされていないというべきであろう。1日中講義に出て、宿題と予習

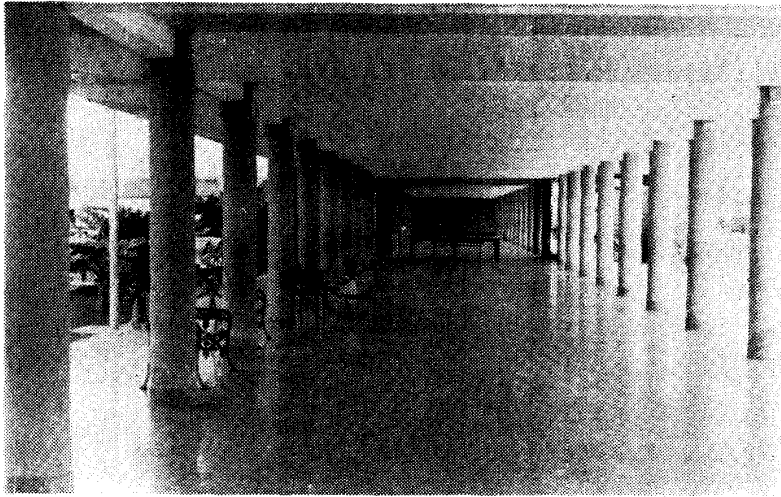


写真1 チュラーロンコーン大学寮の中

とをすませると、ほとんど時間が残らないといったところである。

講義の内容は、日本の大学のそれと較べて決して低いとは思われない。かえって、基礎的な知識は、授業時間数の多いことと出席・試験のきびしいことにより、日本におけるよりも、より確実に教え込まれているのではなかろうか。ただ、その基礎をもとにして独自の研究を進めて行くということは、あまりされていないようである。わたくしが出席した講義で面白いと思ったのは、「タイ語音声学概説」と「タイ語の構造」とである。前者は、まず音声学史及び一般的な音声学を説明したのちタイ語の音素体系の概説に入る。後者は、タイ語の文法体系の記述研究である。若い先生の中には、講義と別に、近代的な言語学の立場からタイ語の研究を進めている人たちが多く。たとえば、先にあげた「タイ語の構造」の他にも、「チェンマイ方言の音素論」やソクラー方言の音素体系に関するものなどがあり、一般に公表されていないのが残念である。タイ語に関する研究は、やはり、進んでいると思う。傾向としては、歴史的あるいは比較言語的研究よりも、むしろ記述的な方面で新しい研究が進められている。先生あるいは卒業生の中には、真剣にタイ語と取り組んでいる人達が多い。これらの人たちにとって、タイ語は母国語であり、タイで話されている他の言語を調査する際にも、自分の言葉を媒介として調査出来るという強味があるのはうらやましいことである。

学生はみな非常に行儀がよく、特に外国人に対して

は礼儀正しく親切である。服装も地味である。日本で予想され勝ちなアロハなどは見られない。男子は、白いシャツに紺のズボンが最も普通で、中には長袖を着てネクタイをしめている者も相当ある。女子は、やはり、白いシャツに紺のスカートで、1年生は全員が白のソックスをはくことになっているので一目でわかる。別に高級品ではなく、ごく質素なものであるが、いつもきれいに洗濯してアイロンを当てたものを身に着けている。日本でいう、いわゆる「南方的」なところなどぜんぜんない。そして、全員が自分は大学生なのだというほこりを持っている。

非常に明るく活発であって、神経質な者や、ノローゼの傾向のある者などは、まだ会ったことがない。一般に、自分の生活とか人生とかに対して自信を持っており、かいぎ的な態度の者は、ほとんどいない。自殺などということは考えられないのである。良し悪しは別として、日本の大学生よりもタイの大学生の方が幸福そうである。別に、タイにおける方が日本におけるよりも、就職が楽だとは限らないのである。文学部の学生は、卒業後、中学あるいは高校の先生になる者が最も多い。中でも、英語、フランス語の先生が多いように思われる。大学における課目に関しても、英語を取る者が最も多い。英語ができるということが出世の手段の1つとなりうるのだと思う。

学年の始まりは6月中旬である。それからしばらくして新入生歓迎のための行事が行なわれる。朝早くから行なわれ、歓迎パーティーのほかに演劇、音楽、タイダンスなどのもよおしがある。2～3日前から会場の準備にかかっているようである。この日に、立派な本が配布される。これから10月中旬までが前半で、この時期に中間考査があり、その後短い休みがある。このような休みにはたいいていの学生がグループを作って旅行に出かける。費やす時間の割には非常に多くの場所をせわしくまわって行く。去年は、文学部の学生の多くがチェンマイにきた。11月初めから2月下旬までが後半で、最後に学年末試験があって、これが3月20日ごろに終わると夏休みに入る。この休みが1年中最も長い休みである。中間考査ではそれ程でないにしても、この学年末試験の際は、全員が文字通り必

死である。及第点を取ることができなかった場合は、勿論、追試験はあるけれども、それでも落ちた際には、この失敗した課目を次の年に取るということとはできず、もう1度同じ学年をくり返さなければならない。このように、各年にいくつかの課目に失敗しているうちに、どうにもこうにも動きが取れなくなって、ついに退学して行く学生もある。試験をやめてレポートを提出させる形を取ることばまれである。試験が終わって夏休みに入ると、皆表情が変わるくらいほっとして、生き生きとするのである。地方から出て来ている学生は帰郷するわけだが、

その前にたいていの者が友達と旅行する。またこの休み中には、厚生福祉局 (Krom prachaasónkhrǒ?) の山地民福祉課 (Koon sónkhrǒ? chaawkhǎw) の主催で、大学生の中から有志者が集って方々の山地民の村の学校へタイ語を教えに行く。これに参加する学生も年々増えているということである。

タイの大学全体についていえることかも知れないが、文学部は特に女子学生が多い。大体90%が女子である。多いとか少ないとかいうよりも、女子の中に男子がわずかにまぎれ込んでいるといった方が当てはまるかも知れない。何故かとたずねてみると、男子学生は、「文学部は就職がむずかしいから、男はみな技術系の学部へ行ってしまふのだ」とこたえるし、女子学生は、「男子は知能的に女子にかなうものが少な



写真2 チュラーロンコーン大学の食堂

ったから入れなかったのだ」と答える。わたくしは寮に住んでいたが、男子寮では、文学部に属しているのはわたくし1人だけであった。こちらの女子学生は、男子学生よりもさらにどうどうとしており、ふん切りの悪いようなところは全然ない。物をいう時にも、そのものずばりを実にはっきりと喋る。勉強のよくできる者も、女子の方により多いようである。

わたくしは寮に住んでいた。寮は大学のすじ向いに、通りをへだてて男子寮と女子寮とがある。1部屋に2人が入り、洗面所、洋服ダンス、ベッド、机がついており、日本の大学の大部分の寮よりは居心地がよいのではないと思う。各部屋には網戸がキッチリとはまっているので、蚊の多いバンコックであるにもかかわらず、蚊帳も線香も要らない。洗濯場と大きな食堂があ

り何も不自由な点は無いのであるが、唯一つ困るのは、夜やかましいということである。寮の1階はロビーのようになっていて、そこにテレビとステレオが置かれているので、毎晩それを大きくかける。時々どうしてタイ人はラジオを小さくかけることができないのだろうかと思ひに思うことがある。ラジオとテレビを同時にならしたうえ、楽器をならしながら大声で歌を合唱するグループも出て来る。こうなると勉強も何もできたものではない。寮では余り勉強はしていない。宿題と予習以外のことをやっているのをほとんど見たことがない。本もあま

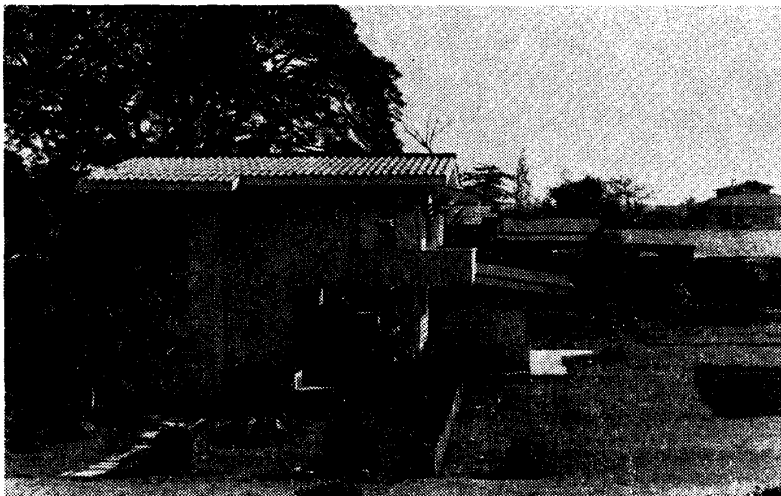


写真3 チュラーロンコーン大学寮



写真4 チュラーロンコーン大学の食堂

り持っていない。読む本はたいてい教室で推薦されたものか、サイドリーダーとして必要なものに限られる。一部の例外を除いて、1人あたり10冊以内しか持っていないようである。これは一般の学生の経済状態と関係していると思う。平均1ヶ月に使う金額は600~700バーツくらいで、少ない者は400バーツくらいである。この割に本は安くはない。タイ語の本で平均30バーツくらい、洋書を買うとなるとどうしても100バーツは出さなければならない。本を1冊買うというのは大変なことなのである。アルバイトをしている学生はいるにはいるけれども、日本におけるよりもずっと少ない。大部分の学生が何かのアルバイトをしていると

いうようなことはない。仕事の口がずっと少ないのである。僕の知っている範囲では、中学あるいは高校で非常勤講師をしているもの、印刷屋の校正をパートタイムでやっている者などで、家庭教師をしているという者には、まだ出くわしたことがない。寮の部屋代は1日4バーツである。寮と大学とで食事をすませれば、腹いっぱい食べても1日15バーツですむ。

大学生の好むスポーツとしては、サッカーがあり、ラグビーも好まれている。各大学対抗のサッカー試合には盛大な応援団が集まって来る。もっと日

常的なスポーツとしては、ピンポンとバトミントンとがあり、これらはどこでも行なわれている。伝統的なものには *takrôo* があり、これはビルマの *chînldoun* に当たると思えばよい。実にうまい。娯楽の代表はやはり映画であろう。日本の映画もよく知られているが、タイに來ている日本の映画というのはロクなものがないので困る。一般に日本に対する関心は強いのであるが、そのわりにはよくわかっていない。大学生の中にすら、「日本には今でもサムライがいるか?」とか、「日本と朝鮮は同じ国か?」などという質問をする者がいる。

1965年3月28日 チェンマイにて。